



父さん弁当

井口昭久

子供たちが小学生の頃、私は夜の遅い日が多く、起床する時間が遅かった。

その日、目覚めたときには妻も子供も出て行ったあとで、手伝いのおばさんが掃除をしていた。妻も医師として働いていたので、週に2回、60歳代の女性が掃除と洗濯のために我が家へきていた。時には学童保育から帰ってきた子供たちの話し相手もしてくれていた。私たちは彼女のことを「おばさん」と呼んでいた。

居間のテーブルに妻が作ってくれた弁当が置いてあった。珍しいことに風呂敷に包まれていた。その弁当を持参して大学へ出かけた。

数年経つと、次男はすき焼きが嫌いになってしまった。

ステーキとすき焼きを買うついでに、翌日の子供たちの弁当の食材もスーパーで買ってきた。子供たちの弁当には、焼肉とキャベツを炒めソーセージを入れた。そして入り卵をご飯の上に散らした黄色の弁当であった。

初めの頃は3個作って私も大学へ持参した。しかし1年間も同じ黄色の弁当だと月に2、3回といえども飽きてしまった。私は自分の弁当は持参しないで、食堂でバラエティーに富んだ昼食を摂るようになった。

子供たちは同じ内容でいつも黄色の弁当を持って行った。小学校5年生になった長男が言った。「200円ちょうだい」どうやらパンを買って行きたいらしかった。

私は尋ねた。「どうして?」「友達にまた父さん弁当かよ、って言われるんだよ」「でもいつも全部食べてくるじゃない」「お肉やソーセージを隣の子がよそ見している間にそ

妻は毎日、子供2人の弁当を作っていた。たまに、ついでに私の弁当も作ってくれた。妻は月に2、3回の当直をやっていたので私は月に2、3回子供たちのために夕食と、次の日の朝食と弁当を作らなければならなかった。

子供たちのためにあれこれ試みたつもりだったが、塩サバの味噌煮を作ったりして子供たちには父の夕食は不評であった。彼らに好評な料理はすき焼きとステーキだけであった。私の夕食はその2つだけになった。

少ない小遣いから高い食材を買い、毎回同じことを繰り返した。

の子の弁当の中に入れるんだよ。そうすると最初からあつたと思っ

て食べるんだよ」
以来、弁当は作らず200円を渡すようになった。

ところで、その日、大学へ持参した風呂敷包みの弁当は、いつも



の妻の作った物と趣が異なっていた。アサリのつくだ煮や、芋やコンニャクの煮物があった。ご飯は少しで物足りなかったがおいしかった。

夜遅く帰宅すると妻が怒っていた「あなた誰のお弁当を食べたの!」。私が食べた弁当は、おばさんが自分のために持参して居間のテーブルに置いておいたものであった。
後日、優しいおばさんに謝ると頬を染めて「恥ずかしい」と言った。